

国際常民文化研究機構 第2回国際シンポジウム プログラム

“モノ”語り－民具・物質文化からみる人類文化－

Things Talk: Human Culture from the Perspective of *Mingu* and Material Culture

日時：2010年12月11日（土）－12日（日）10：00－18：00

場所：神奈川大学 横浜キャンパス16号館 セレストホール

12月11日（土）10:00-10:30

開会の辞 中島三千男 神奈川大学学長
趣旨説明 佐野賢治 神奈川大学日本常民文化研究所

12月11日（土）10:30-18:00

公開研究会「民具の文化資源化－“モノ”研究の新たな挑戦－」

12月11日（土）10:30-12:30

Session I 「民具名称の諸問題」

1. 検索タグとしての標準名－農具の歴史を踏まえて－ 河野通明
2. 民具名称のなりたち－奥会津只見の事例から－ 佐々木長生
3. 比較文化研究のための民具名称－ラオス北部と南九州の現場から－ 川野和昭
司会進行 神野善治 武蔵野美術大学・機構グループリーダー
コメンテーター 八重樫純樹 静岡大学

12月11日（土）13:30-15:30

Session II 「民具からみる東アジアの比較文化史」

1. 中国文化形成の基層性と多様性 楨林啓介
2. 沖縄と福建における亀甲墓をめぐる比較研究 小熊誠
3. 現代民具に「消費者の生産」を読む－石垣島の農具変遷を中心に－ 朽木量
司会進行 志賀市子 茨城キリスト教大学
芹澤知広 奈良大学
コメンテーター 角南聡一郎 元興寺文化財研究所・機構グループリーダー
何彬 首都大学東京
太田心平 国立民族学博物館

12月11日（土）15:45-17:45

Session III 「フネとカラダ－フネの構造と漕法－」

1. 身体活動の延長上にある北方船の技術－アムール川のムウとオモロチカ－ 赤羽正春
2. 手櫂（パドル）と民俗－トカラから八重山まで－ 板井英伸
3. 櫂・櫂の操作と絵画表現 昆政明
司会進行 後藤明 南山大学・機構グループリーダー
コメンテーター 門田修 （有）海工房
洲澤育範 伝統シーカヤック造舟所 イサナ・カヤック

12月11日（土）17:45-18:00

総括 小川直之 國學院大學・折口博士記念古代研究所

国際常民文化研究機構 第2回国際シンポジウム プログラム

“モノ”語り－民具・物質文化からみる人類文化－

Things Talk: Human Culture from the Perspective of *Mingu* and Material Culture

日時：2010年12月11日（土）－12日（日）10：00－18：00

場所：神奈川大学 横浜キャンパス 16号館 セレストホール

12月12日（日）10:00-10:30

開会の辞 中島三千男 神奈川大学学長
趣旨説明 佐野賢治 神奈川大学日本常民文化研究所

12月12日（日）10:30-18:00

国際シンポジウム 「“モノ”と“ヒト”の人類文化史」

12月12日（日）10:30-12:00

Session I 人と道具

1. 道具と身体技法 ー社会に織り込まれた技術の役割をどう理解すべきかー フランソワ・シゴー
2. 道具の人間化・脱人間化、人体の道具化
ー *Homo portans*（運ぶヒト）の諸相
：モノ・身体・社会の結節点の一つとしてー 川田順造
進行 神野善治 武蔵野美術大学・機構グループリーダー
佐野賢治 神奈川大学日本常民文化研究所

12月12日（日）13:00-14:30

Session II 人と“モノ”

1. 中国歴史文化の中の伝統手工芸 徐藝乙
2. 「モノ」と人間 ー黄河流域における花饅頭の民俗文化ー 周星
進行 角南聡一郎 元興寺文化財研究所・機構グループリーダー
小熊誠 神奈川大学日本常民文化研究所

12月12日（日）14:30-16:00

Session III 人と生活

1. モノから日本の近代生活を探る ー階層・ライフスタイルー 櫻井準也
2. イヌイトとアリュートの「近代化」 ー皮舟と犬ぞりを事例にしてー スチュアート ヘンリ
進行 後藤明 南山大学・機構グループリーダー
平井誠 神奈川大学日本常民文化研究所

12月12日（日）16:15-17:50

全体討論 朝岡康二 日本民具学会
近藤雅樹 国立民族学博物館

12月12日（日）17:50-18:00

閉会の辞 佐野賢治 神奈川大学日本常民文化研究所

執筆者一覧

第1部 「民具の文化資源化 — “モノ” 研究の新たな挑戦—」

●----- Session I -----●

神野善治	武蔵野美術大学 教授
河野通明	神奈川大学日本常民文化研究所 客員研究員
佐々木長生	福島県立博物館 専門員
川野和昭	鹿児島県歴史資料センター黎明館 学芸専門員
八重樫純樹	静岡大学 教授

●----- Session II -----●

角南聡一郎	(財)元興寺文化財研究所 主任研究員
榎林啓介	総合地球環境学研究所 上級研究員
小熊誠	神奈川大学日本常民文化研究所 所員
朽木量	千葉商科大学 准教授

●----- Session III -----●

後藤明	南山大学 教授
赤羽正春	民俗学者
板井英伸	沖縄大学地域研究所 特別研究員
昆正明	青森県立郷土館 学芸課長
洲澤育範	伝統シーカヤック造舟所 イサナ・カヤック 船大工頭

●----- 公開研究会「民具の文化資源化 — “モノ” 研究の新たな挑戦—」総括 -----●

小川直之	國學院大學 教授
------	----------

第2部 「“モノ” と “ヒト” の人類文化史」

●----- Session I -----●

フランソワ・シゴー	社会科学高等研究院（フランス）、人類学者
川田順造	神奈川大学日本常民文化研究所 客員研究員

●----- Session II -----●

徐藝乙	南京大学（中国） 教授
周星	愛知大学 教授

●----- Session III -----●

櫻井準也	尚美学園大学 教授
スチュアート ヘンリ	放送大学 教授

●----- 国際シンポジウム「“モノ” と “ヒト” の人類文化史」に参加して -----●

朝岡康二	日本民具学会 会長
------	-----------

International Symposium Report No.2

MEXT approved Joint Use / Research Center

International Center for Folk Culture Studies

The 2nd International Symposium

"Things Talk: Human Culture from the Perspective of *Mingu* and Material Culture"

国際シンポジウム報告書Ⅱ

文部科学省認定 共同研究拠点 国際常民文化研究機構

第2回国際シンポジウム “モノ” 語り —民具・物質文化からみる人類文化—

発行日 2011年7月20日

編集 国際常民文化研究機構

発行 国際常民文化研究機構・神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1

〒221-8686 神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1

電話：045-481-5661(代) FAX：045-413-4151

URL <http://icfcs.kanagawa-u.ac.jp/>

印刷 株式会社精興社

国際常民文化研究機構のロゴ・マーク “文化を紡ぐ”



「糸車」は昭和10年代、アチックミュージアムで調査のお礼に渡していた手拭に染抜かれた民具図案の中から、日本常民文化研究所のロゴ・マーク「鋏」の生産具に対応させ、生活具から一点選びました。作図は当時の同人、藤木喜久磨によります。M・ガンジーは、機械文明の行く末を憂い、インドの農民が歩むべき道を糸車、チャルカで象徴させましたが、国際常民文化研究機構では広く「文化を紡ぐ」表徴とし、その意を豊橋技術科学大学で西洋古代史を講じ、ラテン語に造詣の深い相京邦宏先生に訳してもらいました。以下にその解説を記します。(佐野賢治)

英語の culture に当たるラテン語は cultura ですが、この言葉には「田畑を耕す」という原義がより強く含まれます。従って、この場合、cultusの方がより適切と思われる。この言葉は「人間の習慣」から「文化、教養」までより広範な意味を持ちます。或いは「文化」を人間の知識、知恵と読み替えるのなら、sapientia乃至scientiaの方が一般的かもしれません。両方ともsapio、scio「知る、理解する」の派生形です。

次に、「紡ぐ」のラテン語ですが、これを「文化の集積」と捉えるなら、accumulatio（積み重ねる、accumuloの派生形）が適切と思われる。従って、一般的にはaccumulatio cultus、或いは、accumulatio sapientiae乃至accumulatio scientiaeと表現するのが無難かもしれません。が、これでは単に「文化の集積、蓄積」という意味にしかなりません。研究のシンボルが糸車ということですから、「文化を織りなす」という意味ではtexo（織る、編む、組み合わせる）という単語が考えられます。この場合textura（織ること、texoの派生形）culturaeとすれば「文化の織りなし」といった意味になるでしょうか（蛇足ですが微妙に韻を踏んでいます）。

これは文法的に可能な表現ということで、ラテン語に「文化を紡ぐ、編む」という概念が存在するかどうかは不明です。